

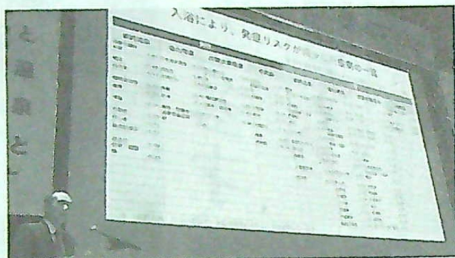
温泉入浴、疾病リスク低減

九州大学都市研究センター（福岡市）は、大分県別府市内にある温泉の入浴療養効果を調べる実証実験の最終報告をした。写真。腸内細菌叢（その）のゲノム解析技術を用い、男女127人について入浴前と同じ温泉に1週間入り続けた後の変化を分析。泉質によって、男女で異なる疾病リスクを低減できることを確認した。

リスク減少効果が最も高かった疾病は男性が単純温泉で過敏性腸症候群、炭酸水素塩泉で前立

九大、別府の実験で確認

泉質・性別で異なる効果



腺がん、硫黄泉で低体重だった。女性は単純温泉で肥満、塩化物泉で2型糖尿病、炭酸水素塩泉で大腸がんだった。

温泉につかることで腸内細菌叢が変化することもつかった。男性が炭酸水素塩泉に入ると、高血圧や前立腺がんの改善・

緩和に関連があると示唆されているビフィズス菌の占有率が高まる。女性が単純温泉に入ると、大腸がんやうつ病などの改善・緩和に関連があると示唆されるコプロコッカスの占有率が高まる。

同センターは別府市、別府市旅館ホテル組合連合会と3者による包括連携協定を2021年4月に結んだ。その一環で今回の実証実験に取り組み、21年12月に男女40人を対象とする中間報告をした。馬奈木俊介センター長・主幹教授は「温泉入浴が疾病リスク低減に効果があるというエビデンスを今後の観光政策に生かせる」と指摘した。